

あなたがいるから、わたしがいるから

鎌寺正一

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

カゲロウデイズを自分なりにまとめてみた結果がこれだよ・・・(白目)

保存されてた小説がデータの隅で燻ってたので軽く編集してポイ。

お目汚しなので見るも見ないも自己責任でお願い致します。

批評等は受け付けませんので悪しからず。

あ、誤字報告はお願いします・・・

目次

あなたがいるから、わたしがいるから	1
君のいない世界で、僕のいる世界が・・・	6
全ての終わりが、願いの世界で・・・	13
EX 俺はどうして、こうなったんだろうか。	17

あなたがいるから、わたしがいるから

暑い夏の日。

蝉の音が響き渡る炎天下のアスファルト。

私と彼は2人、歩道を歩いていた。

「今日はどこいくの?」

彼が言う。

心做しか浮かれてる。

「・・・買い物物の荷物持ちを手伝ってもらっただけ。それ以上でもそれ以下でも無いから」

私がそう呟く。

車道では、多くの車が行き交い、結構ガス臭い。

隣を、大型トラックが騒音を立てて通り過ぎる。

「でも、君と出掛けたこと、あんまり無かったから楽しみなんだー!」

「・・・そう・・・」

無邪気そうに言う彼に、私はそう言った無愛想な返事しか返せない。

たまに、私の頭に過ぎる、彼の姿。

見るも無惨に引き裂かれた、彼・・・

「・・・っ!!」

不穏なイメージを、私は頭を振りかぶって払拭する。

「そう言えばさ・・・」

そんな私を気にも止めない彼は自分の話を進める。

その横顔を、私は見ないふりをしながらただ、歩道を歩いていく。

その時だった。

「・・・?」

風が啼いた。

その音にふと足を止めてしまった私。

それが行けなかった。

「っ!?!」

トン、と後ろに押される感覚。

体が傾き、私を押し出した男の子と空を見れるような形になった時、ソレは見えた。

沢山の工事に使う鉄骨が、彼に降り注ぐのを。

轟音、騒音。

けたたましいセミの鳴き声と、音が鳴り止んだ世界に1つ、紅い華が咲く。

やがて、状況を理解したくない私の耳に、劈くような悲鳴が、否が応でも入ってきた。

理解したくなかった。

「……ー」

目に入れたくなかった。

「……あ……っ……た……」

聞きたくなかった。

「……よかった……ー……」

受け入れたくなかった。

「……いやっ……いやああっ!!」

目を閉じ、動かなくなった彼を見て、私は絶叫する。

目の前に突き刺さる鉄柱に、血の臭いが充満し、私を現実へと突き落とす。

「うそ……嘘だと言ってよ……っ!!そんなところで寝てないでさあ……っ!!」

必死に彼を起こそうとする。

それでも、彼は動かない。

頭の片隅では分かっていた。

もう、彼は目を覚まさない。

「いやあああっ!!」

大きく絶叫したところで。

「はっ……はあっ……はあっ……はあっ……はあっ……はあっ……」
目が覚めた。

8月15日。

私は決まって夢を見る。
悪夢と言っても良いほどの、恐ろしい夢。
毎日、繰り返し、夢を見て。
大体が、楽しそうに笑う彼が死ぬ夢。
だから、私は。

「ダメだっ……っ!?!」
彼の静止を無視して、赤信号へ飛び出した。
迫り来るトラック。

私はその迫る巨体に少しだけ顔を向けながら……
「……よかった……」
自分らしくもない、微笑みを……

刹那、交差点にひとつの赫が咲いた。
鋼の巨体からのガス、衝突による騒音、血飛沫の色。

少女の・・・幼い女の子の優しい香りと・・・サビ鉄の様な鼻を裂く匂いが混ざり合い・・・

そこで少年は、ゆらりと揺らめくヒトカゲを幻視する。

「これは夢だ、嘘だ」と嘆く少年に、そのヒトカゲは無情にも

「嘘じゃあ・・・無いぞ?」

と、嗤っていた。

受け入れたくない現実が少年の頭を駆け巡り、受け入れたくないが故に意識が朦朧としていく中

「・・・ローっ・・・」

花を咲かせた少女の横顔は・・・笑っているような気がした。

『・・・繰り返した、なんども。』

あいつが私を助けようとしてくれてたのも知ってるし、なんども私に手を差し出したのも知ってる。

でも、その手を振り払ったのは私だ。

だから・・・私をあいつにだけは幸せになつて欲しい。

もういない私が願える、最後の思い。

永遠に醒めることの無い・・・繰り返す悪夢を代償とした、私のエゴが生み出した願い。

ああ・・・でも・・・最後に・・・あいつと・・・もう一度・・・』

買い物、
行きたかったなあ・・・

君のいない世界で、僕のいる世界が・・・

「・・・ヒヨリ・・・」

僕は夜の公園でブランコに乗っていた。

大都市に来て3日。

初日は僕の憧れの子、ヒヨリの荷物持ちとしてあちこち回っていた。

電車に詰め込まれたり、ヒヨリとの会話中に車の煙で噎せたり。

ケータイ電話をヒヨリが見に行くって言ってくれた時はものすごく喜んだ。

でも、そんな幸せは直ぐに壊されちゃったんだ・・・。

僕と彼女を、1台のトラックが轢いたんだ。

咄嗟に彼女を庇おうとしたけど、さすがに間に合わなかった。

共々もんどり打って痛みを感じた次の瞬間・・・

目が覚めた。

ベッドで寝ていたんだ。

今のは、夢なのか・・・

随分嫌な夢だ。

そう思いながらその夢を忘れて、夢で見た日付の時計を見て慌てて外にとび出たんだ。

「ゴメンっ、ヒヨリ！」

「遅い。何やってたのよ・・・」

呆れたため僕を見るヒヨリ。

萎縮しながら謝ると許してくれたのか、

「……ま、今日はせいせい宜しくね、荷物持ちさん」

と、振り返ることなく都市を進んでいった。

少し歩くと公園と黒猫が見えた。

「……猫……」

ヒヨリはその猫を抱えると、公園のベンチへ腰をかけた。
僕もその隣に座る。

「……暑いね……」

「まあ、夏だしね……暑いものよ……」

僕ら2人は汗をかきながら会話する。

今思えばなんで店に入らなかつたんだろ、僕達。

「でも、僕は夏が好きだよ」

「私は……嫌いかな……」

その時のヒヨリの表情は僕には読めなかつた。

けど、今ならわかる。

きつと絶望してたんだ。

「……あっ……」

黒猫がヒヨリの膝から飛び出し、公園を出ていく。

ヒヨリはその後を追って駆けだしていく。

それを見た僕は猛烈に嫌な感じがして慌てて走り出した。

嫌な予感ってほんとに当たるんだね。

猫と彼女が向かう先には赤信号。

猫に至っては飛び出ている。

「ダメだっ！ヒヨリっ!？」

僕が手を伸ばして叫ぶ。

でも、僕の声が届く前に……

「……ー……（ノイズ音）」

彼女は……

「ヒヨリ……っ……!？」

赤信号に……

「・・・かふっ・・・」

飛び込んでしまった。

「ヒヨリいいいっ!!」

目の前が鮮血で染まり、宙を舞う彼女の体が彼女の香りと鮮血の匂いを振り撒く。

その匂いは混ざり合い、なんとも言えない不快な匂いに変貌し、僕は思わずむせ返った。

「ぐっ・・・ヒヨリ・・・ヒヨリっ!」

轢いたトラックはどこかへ行き、道路に倒れてる彼女を僕は抱えた。

「・・・ヒビヤ・・・よかつた・・・」

弱々しく微笑む彼女は、すぐに目を瞑って醒めない眠りに着いてしまった。

「嘘だ・・・これは・・・夢なんだ・・・じゃなきや・・・彼女が死んでいいわけが・・・」

「残念だが、これは現実だよ、雨宮響也。嘘じゃあ、ないよ」「っ!」

抱えて涙を流していると、突然目の前から声が聞こえた。

咄嗟に顔を向けるとそこには揺らめくような僕もおなじ体の人物が、嫌に顔を歪めながらこつちを見ていた。

「・・・お前は・・・」

「彼女の命を奪いに来た死神って所かな。まあいいや、なんでもこつちはやることはやったし、彼女の願いも叶えた。俺にはやることは無いな」

意味のわからないことを言うそいつに問いただそうと睨みつけた。

「待っ、待てっ!!うぐっ・・・頭があッ・・・!?!」

途端、頭が割れるような痛みに襲われた。

目の前が歪み、そいつの顔も見れなくなった。

セミの音と炎天下の青空が混じり合い・・・

「はっ……はあっ……はあっ……はあっ……はあっ……!!」

気がつけばまたベッドで寝ていたんだ。

ベッドと寝巻きは汗でぐっしより。

息も荒い。

でも、なんの夢を見ていたのか覚えてない。

思い出せないんだ。

そんなこんな考えているうちに。

気がつけば

「でもまあ……夏は……嫌いかな……」

あの公園にいた。

僕はすぐに行動に移った。

彼女の腕をつかみ、公園を強引に飛び出る。

「なっ、何すんのよ!」

後ろで彼女が怒って話しかけて来るけど、それすらお構い無し、彼女を生かす方法だけを考えていた。

そして、公園を出て歩道を歩いていたらその時。

突風が吹いた。

少し強かったから立ち止まって顔を腕で覆ったんだ。

そしたら……

「ヒョリ?」

突然彼女が走り出して、目の前にとび出ていく。

そのすぐあと……

轟音と共に鮮血が舞った紅い華が咲いた。

先程までの轟音はなりを潜め、風鈴の音と遠くから聞こえる蝉の声が、公園脇の並木の隙間を埋めてから回っていく。

「ヒヨリいいっ!!」

沢山の鉄骨に串刺しにされた彼女は、貫かれた体から紅い華を綺麗に咲かせた。咲かせてしまった。

僕は、目の前の光景が信じられなくて。

「・・・そうか・・・これは・・・夢なんだ・・・」

伸ばした手をだらし無く落とし、ふと顔を上げるとそこには紅い僕が。

『夢じゃないぞ?』

紅い僕は囁いながらそう言った。

そいつの笑い顔になんにも考えられなくなったのか遠のく意識。

その閉じてく視界に捉えた君の横顔はどこか・・・笑っているような気がしたんだ。

8月15日。

決まって、夢を見る。

彼女が死ぬ夢を。

でもこんなに繰り返すのなら。

本当の答えは一つだけなんだよ。

そうと分かれば。

僕は。

目の前に彼女がいる。

信号は赤。

視界右端にトラック。

手を伸ばせば届く。

「ヒヨリっ！」

「っ!？」

届いた手を掴んで引き戻す。

すれ違いざま、僕は体を反転させる。

彼女を引き戻した時、僕の体は道路に飛び込んだ。

後ろに飛ばされた彼女は、今にも泣きそうな顔で僕を見ていた。

そして……

紅が咲く。

狂い咲く。

「ざまあ……みろよ……」

「ヒビヤああっ!!」

8月15日。

「……また、ダメだったよ……」

少女はベッドで猫を抱き抱え泣いていた。

8月18日。

「・・・必ず、助けるんだ・・・」

少年は、月に向かって叫んでいた。

「・・・やってやるさ・・・っ！」

カゲ^{繰り返す}ロウ^{悪夢}デイズは、また繰り返す。

悪夢が終わるその時まで。

全ての終わりが、願いの世界で・・・

「・・・ヒヨリ・・・帰ろう?」

「・・・全く・・・そういう所よ・・・バカヒビヤ・・・っ」

8月16日。

「・・・昨日は・・・散々だったね・・・」

「・・・そうね・・・」

2人の少女少女が、夕焼けを背に歩いていた。

「・・・でも、良かったよ・・・僕達・・・無事でき・・・」いいわけ無いじゃないっ!!」・・・ヒヨリ・・・?」

突然大声をあげる私。

「・・・あなた・・・心が・・・死んじやつたじゃない・・・」

そう、ヒビヤの目は何色も映さない濁った黒色へと変色してしまっていた。

「・・・それでも・・・僕はそれでいいって思った。僕の感情が代償で君を救えたなら、それで。」

虚ろな目には何も映らず、それでも強い意志を感じ取ることが出来た。

「でも・・・目も、見えてないんでしょ・・・?」

目に光が映らないのは、そういう意味でもあった。

彼の目は、風景をも映さなくなっていた。

「ふふ……君の命には、変えられないからね……」
くすりと笑うヒビヤ。

その姿が、とても儂くて……私には、眩しく見えた。

「……まったくもう……バカヒビヤ……」

気がつけば私は目の前がぐにやりと歪んでるのに気がついた。

「……ヒヨリ？」

「……うん、なんでもないわ」

それが涙によるものだと気がつくのに少し時間がかかった。

少しだけ漏れた嗚咽に気が付かなければ涙を流してたなんて気が付かなかったでしょう

「……ヒビヤ……ありがとう……」

「……どういたしまして」

そんな私たち二人を夕日が照らす。

水平線の向こう側、蜃気楼が見える辺りで2人のヒトカゲが仲良く手を繋いでいるように見えた。

1人は紅く、1人は蒼く。

まるで、私たち二人を写すかのように歩く2人は……

瞬く間に揺らぎ消えていった。

それが私たち……いや……

私たちのカゲロウだったんだ。

仲睦まじげに歩いて消えていくカゲロウたち。

消えかけた片方のカゲロウが、その時ふと振り向き……

笑った。

それはもう綺麗に、綺麗に。

「……ヒヨリ？」

「……なんでもないわ」

しばらく声を失ってその様子を見ていた私を訝しげに見ながらヒビヤが声をかけたから、私は頭を振り目を閉じてなんでもないと告げ

る。

再び目を開いた時には憎いくらいの眩しさを放つ夕焼けの太陽と何の変哲もないいつもの風景に戻ってた。

私はヒビヤに気づかれないう前を向いて。

確りと足を踏み締めて。

今、生きていることを実感して。

「さあ、帰ろう?」

「・・・うんっ!」

わたしとヒビヤは笑った。

屈託のない、綺麗な笑顔で。

「これもまた、ひとつの結末。

本来有り得なかつた特殊な結末。

私ですら予測できなかった、幸せ^{トゥ}だけ^ル悲^エしい^ン結末^ド。

でもこれだと、みんなに出会わない。

だから、この結末は受け入れられない。

・・・それでも、夢見るくらいは、いいよね?」

夕焼けの時計塔。

赤いマフラーをまいた少女が、1人、夕焼けを背に涙を流す。

「きつと・・・恨まれちゃうな・・・」

閉ざされた目が開き、赤く光る。

涙は止まらない。

彼女の、心を代弁するかのごとく。

「・・・さ、これでこのお話は終わり。」

みんなはいつかこのお話を忘れちゃう。

だから、私だけは語り継いでいくの。

違う世界線の、語り継がれなかつたお話を・・・」

時計塔から、影が消えた。

そして、その時計塔の時計が、とある時間をもって止まる。

もう二度と、その針は動かない——

EX 俺はどうして、こうなったんだらうか。

いつからか、俺は毎日に既視感を持っていた。
毎日知ってることを教えられ、テストは満点。
周りは俺の事を天才と口を揃えて言うけれど、俺自身、そんな事は無い。

知らないことがあれば覚えられない。

あくまで、知ってる事だから答えられるだけ。

「・・・」

今日もいつも通り、知ってる毎日。

つまらない。

『ふふ♪また100点なんだね♪』

夕焼けに染る路上。

1人で歩くアスファルト。

『え？なんでいつもマフラーをつけてるのかって・・・？主人公みたいでしょ？♪』

暑く、熱く。

焼かれた道上を俺は今日も歩いている。

『・・・そっか・・・私は・・・』

橋の上。

俺は沈む夕日を睨みつける。

『・・・今度は、手を振り払わないでね・・・』

手が届かなかった。

いや、意図的に避けてたんだ。

その結果。

アイツは死んだ。

全部、俺のせいだ。

『もう、シンタローっ・・・！』

アイツの笑顔が頭から離れない。

どうしても、罪悪感が無くならない。

当たり前だ。

俺はあいつを、見殺しにしたんだから。

『・・・シンタロー・・・ごめんね・・・』

・・・くそっ！

燦々と照りつける太陽が、俺の顔に影を這わせていく。

散々になった思い出と、アスファルトに影が這って行く。

そして今日も、俺は・・・オレは・・・。

「・・・さみい・・・」

独りごちるしかないんだ。

8月15日。

俺はいつも夢を見る。

あいつを助けられず目の前で喪う、そんな夢を。

『・・・あはは・・・私、死んじゃった・・・』

真夏の夕暮れの教室。

決まってあいつの亡霊はそう言う。

『ごめんね・・・さようなら、しようか・・・』

ーダメだ、行くなっ！

そんな声も届かずあいつは瞬きした間に消える。

伸ばした手が掴んだのは虚空で、あいつを捉えることなんて出来やしない。

悔しかった。

あいつの思いに気がつけず、のうのうと生きてきた自分に対して。

苦しかった。

あいつがどんな思いで命を絶ったのか。

俺にはわかった。

わかってしまった。

あいつがどうして、涙を流して赤い眼を開いていたのか。同じ赤い目を持つ俺にはわかったんだ。

漸く、だけどな。

『次こそ、手を払わないでね。』

．．．当たり前だ。

もう離さない。

俺には、あいつしか居ないから。

全部忘れてしまった。

思い出したのが遅かった。

何のための赤い目なのか。

マリーは泣き、キドとセトは倒れ伏し、カノは呆然としてる。

俺は口から血が出るしモモは瓦礫の下敷き。

ヒビヤは俺が庇ったから無事だが．．．やべえ。

俺の腹に鉄骨が刺さってる。

．．．モモは無事だったみたいだ。

なんとか瓦礫の隙間から出てきたのを見つけた。

「．．．お兄ちゃん!？」

モモが駆け寄ってくる。

多方、俺の血を見て慌てたのだろう。

「．．．モモ．．．わりい．．．しくじった．．．」

「しゃべらなくていい!死んじやう!」

．．．モモ．．．わりい．．．

「間に合わねえ．．．話を、聞いてくれ．．．」

「いやだっ……死なないですよ……!」

後ろで高笑いしているクロハ(コノハの黒いバージョンだからクロハ)を横目に、俺は最後の力を振り絞ってモモに伝える。

「……気づくのが遅くて、ゴメンな……」

冴える蛇の思惑を思い出ししていれば……こんな事にはならなかった。

「おにい、ちゃん……?」

この最後の光景を俺は目に焼き付ける。

二度と忘れないように。

「……モモ……お前だけでも逃げろ……あいつに、気づかれないように……今なら、まだ間に合……ぐぼっ……」

「……嫌だよ……お兄ちゃん……」

「行けっ、モモおお!」

「……っ!!」

大粒の涙を流して去っていくモモ。

「……クハハハハ!感動のお別れだねエ?でも無意味さ……この世界は全て、カゲロウに埋まるのだからなあ!」

……冴える蛇……

「……いまに、みてる……いつかかならず……おれのへびが……おまえを……たおすぜ……」

薄くなる視界に、あいつの声が響いた。

『シンタロー、頑張って!』

……今度こそ、上手くやるさ……

「馬鹿な・・・お前は・・・どうしてお前が・・・!?!」

「わりいな・・・お前を止めるために、俺は何度も人生やり直してんだ。対策なんて、お手の物だ。」

青空の下。

冴える蛇と対峙する俺たちメカクシ団。

「くそっ・・・」

「それに、お前は蛇だろ? だったら足元のそいつの願いも叶えるよな?」

「・・・はっ!?!」

咄嗟に下を向く冴える蛇。

地面にはクロハ・・・では無くコノハが映っていた。

『・・・あの子が、もう一度人生を歩めるように・・・。』

願いを聞いてしまった冴える蛇は猛スピードで贄にされていく。

「どうしてだ!?! なんで、こんな・・・そうだっ! 願いを!」

俺の願いを叶えろおお!!」

「そんなことしても無駄だ。蛇一体につき願いはひとつまで、だろ?」

そう言っている間にも冴える蛇は水面へ沈んでいく。

そして・・・完全に沈みきった蛇の格が、水底で弾け崩れた。

「・・・ようやく・・・終わらせた」

犠牲も大きく、大変だったけど・・・。

これで、ようやく・・・。

カゲロウデイズが、終わったんだ。

俺は沢山の未来を見てきた。

俺が死ぬ未来。

仲間が死ぬ未来。

何一つ救えなかった世界。

けど、今俺がいる場所はその全ての世界の結末とは違う結末になった。

今までは18歳の8月15日には死に、記憶を受け継いで来た。

それが今は18歳の8月30日。

もうすぐ、夏が終わる。

「シントロー！早く行くよー！」

「おう、ちよつと待ってくれ」

そろそろアヤノが嫌いから行かないとな。

まあ、なんだかんだ言っただ俺は。

夏が大好きだー